

に使われているのだ。そして破格の待遇を受けていた。

我々は共產主義には聞く耳を持たず、使役集合の号令が出ると、はだして飛び出し、収容所の裏山に行つてまきづくりが日課だった。

五月二日ころだった。帰国の船がくるので、身体検査と持ち物の検査を受けた。私は同輩の髪と爪を持っていたので、検査官に見つかからないようふんどしの尻に入れて隠し、なんとかみつからずに済んだ。この人は東京高島屋に勤務されていたので、帰国後届けた。

五月五日、乗船し、その晚出港だった。船上は明優丸という七千トン級の貨物船で梯団長はナホトカで共產主義の洗礼を受けた旧日本兵だ。この連中にナホトカでは相当苦しい思いをさせられたので、船中では大騒ぎとなったが、五月七日、無事に舞鶴に上陸ができて、よくぞ日本の土が踏めたという思いだった。

シベリア抑留体験記

大阪府 川畑 克志

終戦よりソ連領ウズベック共和国タシケント収容所到着までの道のりを申しますと、昭和二十年八月十五日終戦となりましたが、シベリア抑留の身となって奉天↓ハルビン↓黒河を経てブラゴエシチエンスクに到着（二十年九月初旬ころだったと思う）。部隊（千人単位の貨車輸送）ブラゴエシチエンスクからハバロスク↓ウラジオストックを経て日本に帰れると思ひ込んでいたため、途中の食糧は一人米四合、乾パンだけだった。黒河に着くと食糧も切れてしまったので、千人分のコーリャン三袋支給された（一袋八十キロ）。我々は日本に帰るのだから辛抱しようと戦友と励ましあったが、ブラゴエシチエンスクに着いたときは約百人が死んだ。ブラゴエシチエンスクに着いたときはバケツ一杯の水を持ち上げる気力もなかった。ここからが死との戦いだった。

毎日々々サトウ大根、ジャガイモ、ネギ等の部隊の食糧集めで私役（小使）で追い立てられ、十五人単位で各部隊に引つ張られた。小隊ごとにソ連兵一人がついて見張っておる。万一逃げ出したとなると自動小銃でバラバラと撃たれる。ブラゴエシチエンスクで約一か月余り苦しみながら、まだかまだかと出発を待つばかり。毎日の私役に引き出されるので、今日こそ盗んで大根を腹いっぱい食べるかと戦友と話しながら、出かけたちょうどよいとき大根一本を引き抜き歩哨（ソ連兵）に見つからないようにして後ろ向きになって二人半分ずつ割って、服でどろをふきとり口に入れたが、砂まじりでジャリジャリしたが見つかつたら最後、銃でたたかれるのでガムシヤラにのみ込んだ。それでも腹の中は平気だった。毎日ロクストッ食べていないので大使小使も出ない。また翌日私役に引き出され、今度はジャガイモとりだった。昨日のようにうまくいくといいなと戦友と話合つて出発した。こんどは収穫も少ない。昨日他の部隊が収穫し残ったものは少ない。ジャガイモが時たま見つかる程度だった。歩く元気もなく、フラリフラリして探しているうち

神の助けが一握りくらのジャガイモ二、三個足に当たったので、あわててドロを服でふきとって口に入れたが、のみ込んだ瞬間ノドがいがろうて声が出ないくらいになった。このときだけは二人で牛のジャガイモは食べられないなあと兵舎に帰つてから話し、雑談が絶えなかった。

ブラゴエシチエンスクには各方面から集まった部隊約一万五千人とか、いやそれ以上だとか、小隊長が話してくれた。何分輸送されるのが千人単位で抑留されるのだからたまつたものではない。一列車は十二両だった。さあここからが大変。いよいよ我々の部隊発車となる。ちようど十月初旬だったと思う。シベリアはもう冬にはいつている。毛布一枚で貨車一両に八十人から八十三人で、ストープ一個だけ、石炭が一日分として石油缶で三杯分しかない。車中は両サイド二段になっていて四か所分に分けられていた。一段に二十人ずついて八十人となる。窓は締め切つて目張りして外部は見えないようになり、一車両に二人のソ連兵が銃を持って乗っている。

出発時刻九時ころだったと思う。兵隊は一人も時計は持っていない（見習士官と少尉、下士官だけ）だれか一人くらい隠し持っていただろうが、下士官以下は全員持っていない。黒河、ブラゴエシチェンスクでソ連にもぎ取られた。日本に帰るとき返済するからといって名前を書いて一時預けるといって引き上げられた。

出発九時と小隊長が知らせてくれた。どちらを向いて出発したのかわからない。たぶん夜出発したものと思う。電灯もない真っ暗の車内ではらくして野原で人家もないところで一時停止し、約一時間ぐらいしてから、各車両ごと私役が出て、食糧が分配された。一車両ごとに一袋（五十キロ）の大豆が分配されたが、どのようにして一人々々に分けるのかなと思った。結局一人当たりスプーン一杯（約二十五粒）が支給された。後々に聞いた話だが、他の部隊の中には食糧も米ばかり、野菜等も十分確保した部隊も多くあったと聞いてびっくりするやらうらやましいやら、情けなかった。出発して何日かたっただろうか、停車したところがバイカル湖近くの大きな駅で（チタ駅）びっくりした。ここに来て初めて西

に向かっていることがわかり、こりゃたいへんな目に遭う、きっと死刑だろうと覚悟した者が、小隊の半分がそう話し合ってだれも彼も口を聞く人さえ見当たらず、ただただ無言で地面に寝転んでいるしか仕方がなかった。チタ駅まで約十五日かかっていると小隊長から聞き、到着地点まで体がもてるかどうか心配々々で次期の発車を待つ。戦勝とはいえ過去のドイツとの戦争が国の全力集中の戦いだったため、食糧は言うまでもなく乏しい上、鉄道輸送もゴツタ返しだったのである。

当時の日本兵の強制抑留者は七十万人ないし八十万人も言われている。その兵の輸送だから日数もかかることだろう。このチタ駅で食糧（大豆）を積んだ。砂漠地帯を通過するので約一週間分（七袋）と水一人七合を列車に積み込んだ。これから先どうなることやら体力のない戦友はバタバタ死んでしまう。このチタ駅までに黒河から百五十人以上死者が出ている。一日の食糧として大豆二十五粒だけ、それに水、少量の食べものでチタ駅まで来たことを思うともう先が見えている。どうせモスクワに着くまで全員栄養失調で死ぬのかなとも思った。

これから先どこにつれて行かれるかまだわからない。

砂漠地帯に入る手前の駅、いままで一番大きな駅である。ここで全員下車し、入浴食事と大変なご馳走だった。一気に元気が出たようだったが、これもほんのつかの間。食堂も大変大きく百人単位で食堂に入る。残りの者は食堂前の広場で待機し、自分らの小隊が回ってくるまで約二時間以上だった。ソ連の子供（八歳十二歳）の者が三、四十人くらい来て、石をなげるやら棒切れでたたくやらソ連兵がとめてもしつこくやってくる。また子供らは「ヤポンバンザイ」「ヤポンバンザイ」と言っている。ヤポンとは日本バンザイとはバカにしている言葉だろうと思う。日本は負けたのだ、ソ連が勝ったのだと言わんばかりに何度も何度もバカにされる、同じ十六歳十八歳の若者がやって来て、ヤポンはモスクワで全員殺されるのだと大声でしゃべっている。死ぬことを両手（人差指と中指）で合わせて見せる。自分らは戦友と話し合っただけでほんとなかとびっくりするやら、だとすると大変だぜと、脱走しようとも思ったが、ソ連兵の監視が厳しいのでどうにもならない、長い間待ってた食堂入りと

なった。一テーブルに十人ずつで一皿にマカロニ、米飯スプーン一杯、ジャガイモ三個分入っていた。それに酸っぱい漬け物がどんぶり鉢で十人に対し二鉢があった。椅子に座ると同時に皆が一気に口にすする、食べ終わるのがわずか五分である。

入浴とのことで周りを見てびっくりした。他国でも聞いたことのない風変わりである。その順序は次のとおりである。

服を全部脱ぐ

むし風呂に入る（合図があるまで出られない、約三十分）

ハダカでここで待っている（約三十分）

自分の服が出てくるまで番号待ってここで服を着る

消毒は徹底され、シラミ等また他の菌も殺虫されている。終戦日から約二か月入浴していないので、シラミはわき、体がよごれほうだいだった。この大駅を後に再度自分の乗った貨車に乗って出発した。

砂漠地帯を一か月余りだったと思う、この間は一週間二回ほど黒パン約二百グラムを支給され、大豆スプーン

で二杯が一日分だった。貨車は石炭バケツ二杯分しかく
れなかった。我々二等兵は一番後でストーブの火は消え
かけていて大豆を「いっても」半焼き同様に情ない、身
にしみる。上は将校から順番だから仕方ない、この砂漠
内を通過した頃に銃殺されるのではと、いらざる心配が
募って眠れない毎日だった。奉天長沼高女を出て三か月
近くになっただろう。最初のうちは日数を数えていた
が、この頃は記憶も薄らぎ月日はわからなかった。ブラ
ゴエシチエンスクで持ち物一切引き取られ、時計、万年
筆、鉛筆、ノート、一切書くものなしでどうにもならな
い。私はたばこが大好きだったため、今になっては愛煙
家たちはどの貨車でどうしているのかなと思つたが、た
だ背のうをまくらに横たわっているだけだった。

車外で小休憩と時々下車されたが、体はフラフラで歩
く元気もない。それもそうだろう。貨車に積み込まれ
ギョウギョウ詰めで食糧不十分だから、二十六歳の私
だつて体重四十キロとなつて、やせおとろえ骨と皮の状
態、もう歩く気力さえなかった。砂漠地方を通過してあ
る駅で下車され、一時間小休憩となり、公園らしい公園

とは名ばかりで樹木の大中小があり、落葉拾いや新聞紙
や紙切れ等を拾つてたばこ代用にする。またヨモギや枯
れものをとつて休憩中に手でもみ軍足の半足一杯になる
ほど集め、時折自慢のたばこばかり丸めて吸うのがま
ことにうれしい、懐かしいたばこの味だった。マッチだ
けだったので、大事に大事に内ポケットに入れ必要以外
は出さぬと決めて、戦友にもだれ一人貸さなかつたこと
を思うと、いじわるも仕方がなかつた。その後の車内で
の喫煙用に綿をねったひもに火をつけてストーブ横につ
るして置いてだれにもでも、好きな人は使用できるなど
思つて火繩をぶら下げるようにしてやつた。皆も大へん
喜んだものだった。ここで食糧配給があり水、砂糖大根
(二人で一本)を何よりの食べものと大事に持つて非常
の折り食べることにしていた。

このあたりにくれば体力のない戦友は、その日によつ
て違うが、一日に二三人は死んでいく。夕方の日没を
見計らつてソ連兵総責任者(輸送列車)に連絡して許可
をもらい、下車して小さな穴を掘つて戦友の霊の冥福を
祈り、黙禱し再乗車のたび思い出すが、異国の地に眠る

戦友はさぞ残念だったろうと目頭が熱くなる。私たちの列車（千人）は何人くらい死んだのだろうか、百人か、いや百人を超していると思われる。そうこうするうち、今までと違った大きい駅に着いた。引込線も二、三十本もあり、この駅は全部貨車終着駅のようなのである。我々の貨車以外は全部シートをかぶせてあった。おそらく満州国から没収したもののばかりと思う。

約三十分くらいたっただろうか、下車命令が出て、見ると一面野原で、あたりは真つ暗、駅の電灯もまばらで、足元もはっきりわからない。おのおのブラブラ、足もついてこない状態。四列縦隊どころかまちまち歩きで幽霊のようにフワリフワリで言葉を出す気力もなかった。あたりは大テントが五、六十張られていた。小隊長の名によれば「この駅がタシケント駅」とやら、戦友同士涙を流す者さえいた。ここに着いたのが夜の十時十一時ころだと小隊長が言って皆を励ましてくれた。他の多くのテントは全部日本兵抑留者を収容するそうだと言われ、このテント内で何年暮らすことかと思えばぞっとする。我々の部隊もすでに八百人くらいになっており、テント

入りも平均して楽だろうと思った。一テントに四十人ずつとやら、この野原に約十個部隊到着していると聞いて約一万人はいると想像した。

ここに約一週間滞在し、食糧も今までと同じように砂糖大根や黒パン一切れだったが、この地に来て初めて兵隊自炊を認めてくれたため、ジャガイモ、ネギ、大根、ニンジン等の配給も倍以上だし、大麦のシャブシャブを飯ごうの半分を支給されたが、麦のカスが多くて飲みこめない。すすって吐きすすって吐きして一杯を飲み終わった。また枯れ葉を拾ったも紙切れも底をついていて心細い思いだ。これから草、枯れ葉を拾い集めなければならぬなどと戦友と雑談する。ここで一週間自由行動だったため、樹木のある周辺を見つけては枯れ葉とりする。広範囲の野原だが周りはソ連兵が銃を持って立哨しているためあまり遠くには行かない。

そうこうするうち、ここの野宿生活も今日限りと思うころ全員（八百人）が四列になって入浴のため出発、歩いて二十分くらいのところに浴場がありました。もう歩ける力もなく、ただ足の向く方向に引きずっているだ

け、顔から冷や汗が出て声も出ない。入浴が全員終わってのが夜中だったようである。駅の周辺は人通りもない。小隊がとまるたびに全員ベタリと地面に足をなげて転んで次の歩き始めまでだれも声を出す者はいなかった。いよいよ朝の四時ごろではと思うころ、全員が動き始めた。小隊長の話では、当てられた収容所に向かっていると言われ、入浴後からもソ連兵も倍増していて一個部隊に三十人ほどのソ連兵がついていた。収容所とはれんが工場跡で、ドウナツ型のペーチカだ。この中に八百人入れるのかと思いましたが、そんなことっておられない、早く落ちつきたいの一心だけ。

収容所内の生活状況

(1) 起床六・三〇、体操七・〇〇、朝食七・三〇、出勤八時〇〇分

(2) 朝食については入ソ当時から約三か月間においては飯ごうの半分ほどの大麦の高圧炊きで過ごし、時折黒パン支給もありました。約三分の一程度だったと思う。

(3) 昼食も朝食と同様で分隊別に飯ごうを並べておくが特に自分の飯ごうだけしか見ていない、そのため他の

戦友の分は気にせず、少しでも少ないと思ったら文句を言ったものだった。

(4) 夕食は午後六時三十分ごろだったと思うが、何分にも空腹でたまらない、早く飯上げの合図がこないかとはばかり寝台に横たわり戦友とも話すふうもなかった。

毎日の労働作業について、過去三年間において種々の作業をやり、入ソ後の体力も大分衰弱していて力もない。

第一回目の作業については

なれないれんがづくりから出来上がり完成までの作業を約一年六か月で完了する。その間の作業能率は大変なもので、旧ドイツに対して日本人の分は五〇%が一〇〇%とみなされドイツ人は七〇%が一〇〇%とされていたようです。五〇%達成した日は個人名で記入され、一週間ごとに配給米を支給された。一日分達成の人は大スプーン一杯が当てられるため、一週間分としたら大サジ六日分となるため飯ごうの半分くらいになったものだ。そのためこのような待遇を得るのに戦友同士は一生懸命だった。

第二回目の作業については

自分も初体験ですが、やれと言われては仕方なくれんが積みを行い（特に住宅の建設作業）約六か月と思う。つらい仕事だと、しみじみ感じた。

第三回目の作業については

農業（コルホーズ）の野菜づくりが主で特に決められたノルマはなかったが約三か月くらいと思う。

第四回目の作業では

機械工場での諸部品の手仕上げ作業、一日のノルマは一人三個仕上げて一〇〇%とされ一個中隊で三乃至四人でした。その中に私もはいったと記憶している。

第五回目の作業については

道路工事が主で、埋め立て作業及び整備等特に雨天時は雨カッパなく、ぬれて作業するのがつらかった。（約三か月）

第六回目の作業については

れんが工場内の諸機械の修理及び補修等で、特に鍛冶屋さんとなって入隊前の腕前（約八年）を生かし頑張ったものです。先手（ハンマー）振りはソ連人で、日本人

に比べて体格も大きいため使いやすかったです。

この間において公用私用を問わず注文品が多く、特に日本製はさみ及び包丁の製作には、材料は自動車の車輪受けのスプリングを使用するため出来上がりは最高そのもの、焼き入れ後の品物は世界一とほめられ、作業終了後は工場長宅に呼ばれ、超待遇にされたこともあった。

時間外のため収容所入門には工場長自身立ち会ってもらったこともあり、うれしい日も月に一、二回あり。

入ソ以来約三年有余ただひたすらダモイのみ、何事も辛抱と見なれぬ国、見なれぬ民主運動に身をならせなければ帰国は難しいと言われ、心からの民主運動はうそ一本、しかしバレーでは帰国どころか再度引き返される。

ナホトカ全収容所では各グループの共産主義に出来上がりを検討され、合格グループを優先し、ダモイの途につくことなり。